

11 月「聖徒の日」を覚えて 題「御国を目指して」

姫路あけぼの教会牧師 廣田守男

「しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。」（ピリピ人への手紙 3 章 17 ～ 21 節）

外国の諺 「ひとり人の死は、一つの博物館が亡くなったようなもの」。ここに一人ひとりの存在の尊さ・人生の重みが語られています。先に天に召された方々を記念する日に当たり、与えられた聖書のみ言葉を味わいましょう。

私に倣う者となってください パウロはピリピの信徒に、表記の勧めをしました。人には欠点も弱点もある故に中々、他人に言えない言葉です。しかしパウロは唯我独尊的でなく、「私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください」と、多くのキリスト者がパウロと同じ生き方をしていることを示し、その模範に見習うように勧めたのです。これはパウロの行為を指すよりも、パウロが目指した信仰の姿勢を示しているのです。

「私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい。」（コリント人への手紙第 1、11 章 1 節）。パウロはキリストに倣う事を求め、主イエス様が歩まれたように「神様の御心を求め、自分の利益を求めず、他人の利益を求め、神の栄光を現す」ことを願って生きようとしたのです。

勿論、当時のキリスト教会には「ユダヤ主義（割礼を受ける・律法を守ることを主張）」の影響が及ぶ危険性があったのです。それに対し、パウロは「人が義とされるのは、イエスをキリストと信じる」ことである、と主張し、「キリストを知り」、「キリストを誇り」とし、「キリストの十字架の死と復活」に信頼して歩むことである、と強調したのです。

かつてのパウロには「肉を誇りとする」事柄は多々有り、正義感に溢れ、確信を持ってキリスト者を迫害していたのです。そのようなサウロにイエス・キリストが愛を持って「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と呼びかけ、「主よ、あなたはどなたですか」との問いに、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と、ご自身を顕現されたのです。そのキリストに出会ったパウロは「イエス・キリストを知る」ことの素晴らしさの故に一切のものを「損」と思い、「ちりあくた」と思うと告白しています。その上で「十字架に敵対して歩んでいる」人々に、それは「滅びに至る」のであり、「自分の腹を神とし、恥ずべき事を誇り、この世の事しか考えていない」のだと、かつての自分を述懐しながら、涙を流して語ったのです。

信じる者に与えられる恵み 「イエスをキリストと信じる者」は罪を赦され、神の子としての身分を与えられ、天に国籍を持つ者とされたのです。ですから、ひとり一人も

パウロが目指したように、「キリストの苦しみに与り、その死と復活の力」を知ること、「上へ召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目指して一心に走る」こと、「十字架を誇り」とし、「上にあるものを求め」、「キリストの再臨を待ち望む」ように歩みたいものです。私たちは「主イエス・キリストの日」に「私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださる」との希望を抱き、歩ませていただくのです。

天に国籍を持つ者の希望 三重苦であるのに、障害を負っている人々に希望を与え続けたヘレンケラー女史とジャーナリストとの対談を読んだことがあります。「私には二つの部屋がある。こちらの部屋では三重苦ですが、ふすまを開けて隣の部屋に行くと、その苦しみが解かれて栄光の体に変えられるのです。そこでは目が開かれ、耳も聞こえ、口も解かれ、主イエス様にお目にかかり、そのみ声を聞き、神様を賛美する事が出来る」と自分の前に置かれている希望を告白していたのです。

姫路あけぼの教会は小さな群れですが、三年間に毎年ひとりずつ召天されたのです。一年目には、慢性腎不全を患い人工透析の治療を受けている女性、二年目には、その姑に当たる方で脳出血により半身不随になられた女性、三年目には、A L S（筋萎縮性側索硬化症）を患われた男性で、何れも不自由な状態に置かれた方々でした。その方々も新しい栄光の体に変えられてやがての日、再会するとの希望を新たにし、慰められたことでした。

私たちにもこの希望が与えられているのです。主イエス・キリストに信頼し御国を目指し、備えられた馳場を歩ませて頂きましょう。

「また私は、天からの声がこう言うのを聞いた。『書き記せ、「今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである」と。』御霊も言われる。『しかり。その人たちは、その労苦から解き放たれて安らぐことができる。彼らの行いが、彼らとともにいて行くからである。』」（ヨハネの黙示録 14 章 13 節）。